

魔球と直球

牧師 山本 護

戦争責任の懺悔と甲子園野球で、8月は痛みとノスタルジアがない交ぜになる季節。空き地で三角ベース野球をしていたあの頃、皆が熱中した「巨人の星」。父の怨嗟をド根性で引き受けて燃えあがる演歌調の漫画でした。高校野球で活躍し巨人軍に入団した小兵の星飛雄馬が、物理を超越した魔球で巨漢の米国人選手を鮮やかに打ちとります。



日本の戦争末期には「魔球」が濫発されました。陸軍大臣を兼務する東条英機首相は飛行学校を訪い、「敵機をどうやって撃ち落とすか」と問いました。学生が「高射砲でこう打てば～」と技術的に答えると、東条は「違う、精神で撃ち落とすのだ」と叱ったそうです。高度9千メートルを飛ぶB-29は高射砲ではとどかないので魔球で打ちとる。こんな精神性が犠牲者を何倍増やしたのでしょうか。

中学生の頃、ツッパリの剃り込みリーゼントは黙認で、自由の証したる長髪は禁止されました。ボンタン(不良のズボン)はスルーされても、ピースを象徴するGパンで登校すると阻止。生徒集会でそうした理不尽に声あがっても、先生の答えはまるで「魔球」でした。教区総会には教団から問安使が来ますが、総会の度ごとに「沖縄教区が教団と距離を置いている」原因を示して解決策を迫っています。しかし問安使の回答はしらばっくれた「魔球」。直球で尋ねているのに、キリスト者が異教の球種で返しちゃダメでしょ。

よく知られている「善いサマリア人」のたとえ(ルカ10:25～37)。道端に倒れた瀕死の人を、見ぬふりして立ち去った祭司とレビ人(10:31～32)。彼らは神殿勤務の事情から「ケガれた血」に触れることを憚ったのでしょう。「だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか(10:36)」というイエスの問いに、律法学者は渋々「その人を助けた人です(10:37)」と蔑視するサマリアの名称を忌避して答えました。するとイエスは「行って、あなたも同じようにしなさい(10:37)」と直球で対応するように命じます。

眺めてみると、世はごまかしの「魔球」が幅を利かせていて、「直球」は軽んじられます。寺山修司は「キャッチボールは現在人が失いかけている“対話”を回復するためのスポーツである」と語りました。今こそ思いきり投げ合うキャッチボールが必要です。捕球するとグローブをつけた掌にヒリッとした痛み。そうか、これがイエスさまの教えなのか。ならば俺も、暴投することを恐れず、直球で力一杯投げ返そう。Ω